

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 31 日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21530700

研究課題名(和文)高齢期夫婦の人生マネジメント方略と精神的健康についての縦断研究

研究課題名(英文)A longitudinal study of life management strategies and mental health among older couples in Japan

研究代表者

岡林 秀樹 (Okabayashi, Hideki)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：90281675

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高齢期における人生マネジメント方略が高齢者夫婦の精神的健康にどのような影響をもたらしているのかを明らかにすることである。2011年に地域に居住する高齢者夫婦1500組に初回調査、2013年に3年後の追跡調査を行った。初回調査に回答した498組の夫婦のデータを解析した結果、「否定的なイベントを受容できる柔軟な態度」が夫と妻それぞれの幸福感にとって重要であることが明らかになった。また、夫の「否定的なイベントを受容したり、老化に伴う喪失を補償しようとする柔軟な態度」が妻の幸福感にとって重要であることが明らかになったが、妻のそのような態度は夫の幸福感に影響を及ぼさなかった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the effects of life management strategies on well-being among older couples in Japan. The initial and 3-year follow-up surveys were conducted toward 1,500 older couples living in a suburban area of Tokyo. 498 couples' paired responses obtained from the initial survey were analyzed. The result showed that a flexible attitude toward accepting unavoidable negative life events was important for both husbands and wives among older couples in Japan. Even more striking were the crossover effects from husbands to wives, where we found that husbands' flexible attitudes toward accepting unavoidable negative life events or in adopting compensating strategies for losses associated with aging are important for the well-being of their wives.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：生涯発達 高齢者 人生マネジメント尺度 精神的健康 縦断研究 夫婦

1. 研究開始当初の背景

(1)高年齢期においても、精神的健康を維持・向上させつつ、年齢を重ねていくということをサクセスフル・エイジング(幸福な老い)という。これまでに、その規定要因として、周囲の人からのサポートなどの対人的要因が明らかにされてきた。高年齢期には、児童期から成人期にかけての能力や技術の獲得という傾向から、能力や技術の喪失という傾向へという移行がみられるが、Baltes(1997)は、高年齢期に適応するためには、この獲得と喪失のバランスを回復させる方略が必要であると考え、それを「補償を伴う選択的最適化」(Selective Optimization with Compensation: SOC)、あるいは、人生マネジメント方略(Life-Management Strategies)と命名している。具体的には、年をとることによる資源(能力・技術)の喪失を補う(補償する)ためには、関心のあるすべてのことをやろうとするのではなく、自分にとって最も重要な目標を「選択」し、それに集中してエネルギーを注ぐことが有効(最適)であるという考え方である。このSOCという概念を実際に測定するための操作的な定義が成功し、質問紙が作成されたのは、つい最近である(Freund & Baltes, 2002)。Baltesらは、SOCが精神的健康の指標と関連していることを明らかにしているが、我が国ではまだこの概念を用いた研究は行われていない。本研究の第1の目的は、我が国において、このSOC概念の測定尺度を整備し、それと精神的健康との関連を明らかにすることである。

(2)高年齢期において精神的健康を維持・向上させていく上での大きな要因の1つに、家族関係、その中でも特に夫婦関係が重要である。国内外において、夫婦がお互いの精神的健康に影響を与えているという研究知見は多いが、多くの研究は、夫婦の一方のみのデータに基づいたものなので、配偶者どうしの心理状態(精神的健康、夫婦関係満足度など)の相互関係が検討されていない。Raudenbushら(1995)は、夫婦のペアデータを用いて、階層線形モデリング(HLM)という統計手法によって、成人女性の夫婦関係満足度は、自分自身の職業役割満足度だけではなく、夫の職業役割満足度によっても影響を受けるが、成人男性の夫婦関係満足度は、自分自身の職業役割の質のみからしか影響を受けないということを明らかにしている。本研究でとり扱われる高年齢期においても、夫の精神状態の悪化は、妻にも影響するであろうし、その逆もあることが考えられる。また、夫がSOCの方略を用いている場合は、妻もその方略をよく用いていることが予想される。このように夫婦どうしの心理状態に対する分析は、夫婦間の相互依存性を考慮した上で、検討されなくてはならない。本研究では、高年齢期における夫婦をペアで研究協力者として募り、それぞれ独自に質問紙を評定させた上で、お互いの

心理状態の相互関係も明らかにする。

(3)高年齢期の精神的健康は、平均的には、年齢とともに悪化していく傾向があるが、その変化のパターンを個別に検討すると、健康が維持されている人と悪化していく人がおり、一様ではない。高年齢期における人生マネジメント方略、精神的健康における加齢変化のパターンを見出し、その個人差を生み出す要因を明らかにするためには、少なくとも3年以上の期間をあけた2回の縦断調査が必要である。本研究では、それらの要因の中でも、特に、ペアとしての配偶者どうしの相互作用に注目したい。

2. 研究の目的

高年齢期における人生マネジメント方略と夫婦関係満足度が、夫婦相互の精神的健康にどのように影響を及ぼしあっているかについては、未だ国内外で検討がなされていない。高年齢期を幸福に生き抜くために必要なことは何かという課題を、人生マネジメント方略および夫婦の相互性という視点から検討することによって、生涯発達心理学における理論的貢献ばかりではなく、高年齢期における幸福な生き方を考察するという点において大きな社会的意義があると考えた。本研究においては、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

(1) 高年齢期における人生マネジメント方略、夫婦関係満足度、精神的健康の夫婦間における相互関係を検討する。

(2) 初回調査から追跡調査までのそれらの3年間の変化を明らかにする。

(3) 初回調査から追跡調査までの3年間にわたる人生マネジメント方略、夫婦関係満足度、精神的健康の変化に影響を及ぼす要因を明らかにする。

3. 研究の方法

2009年度には予備調査を行い、人生マネジメント方略を測定するSOC尺度の日本語版を作成した。その上で、2010年度に夫の年齢が70歳~79歳である高年齢夫婦1500組に初回の郵送調査を行い、2013年度に初回調査の回答者に対して3年後の追跡調査を行った。

4. 研究成果

(1)SOC尺度の作成

2009年にはBaltesのSOC尺度の日本語版を作成するために予備調査を実施した。英語版のSOC尺度からトランスレーションバックトランスレーションの手続きを経て作成した日本語版SOC尺度(4下位尺度×12項目=48項目)を527名の高齢者に対する郵送調査で2009年10月に実施し、342名の回答が

得られた。さらに 300 名を対象にその 1 ヶ月後に再調査も行った。これらの調査の回答を用いて、日本語版 SOC 尺度の 4 つの下位尺度の信頼性（内的一貫性および再検査信頼性）と、人生満足度、抑うつ、統制の位置、パーソナリティの 5 因子、社会的望ましさとの関連が検討された。信頼性に関しては「選択的選択」尺度の内的一貫性が低かった（係数：.467）が、これ以外の 3 つの下位尺度は、適度な（係数：.65 以上）を示していた。また、再検査信頼性に関しては、4 つの下位尺度すべてにおいて .63 以上の適度な信頼性係数が示されていた。SOC のすべての尺度は、人生満足度、統制の位置とは正の相関、抑うつとは負の相関を示していた。SOC とパーソナリティとの関連としては、神経質傾向と「最適化」に負の相関、開放性と「喪失に基づいた選択」「最適化」「補償」に正の相関、誠実性と「選択的選択」「喪失に基づいた選択」「最適化」に正の相関がみられた。また、SOC のすべての下位尺度が「社会的望ましさ」と有意な関連がなかった。このことは、尺度としては望ましいことであり、原版の尺度構成において、「社会的望ましさ」との関連を弱めるために強制選択法が用いられた工夫が、日本語版においても反映されたため、と考えられる。これらの結果より、日本語版 SOC 尺度において、ある程度の妥当性・信頼性が認められた。尺度の信頼性と実用性をさらに高めるために、Rasch モデルを用いて精選した短縮版（4 下位尺度 × 6 項目 = 24 項目）を作成した。

(2) 初回調査

2011 年 3 月に 1500 組の夫婦に調査を依頼した。SOC 尺度短縮版、FGA 尺度、TGP 尺度、夫婦関係満足度尺度、人生満足度尺度、抑うつ尺度などが質問紙として用いられた。調査の結果、夫 611 票、妻 550 票の有効回答が得られた。夫婦ともに回答が得られたのは 498 組のデータを基に、人生マネイジメント方略と精神的健康との関係を検討した。人口統計学的変数、社会的ネットワーク変数を統制した上で、SOC（補償を伴う選択的最適化）、FGA（柔軟な目標調節）、TGP（頑固な目標追求）の主観的幸福感到に及ぼす影響を階層線形モデリングという統計手法を用いて検討した。その結果、夫婦それぞれの FGA は、自分自身の人生満足度に正の関連があり、自分自身の抑うつに負の関連があった。夫の FGA は妻の人生満足度に正の関連があったが、妻の FGA は夫の人生満足度と関連していなかった。夫の補償（SOC の一要素）は妻の抑うつに負の関連があったが、妻の補償は夫の抑うつと関連していなかった。これらのことから、避けがたい否定的なイベントでも受容できるような柔軟な態度が夫と妻それぞれ自分自身の幸福に重要であることが明らかになった。さらに、夫の否定的なイベントを受容できる柔軟な態度や老化に伴う喪失を補償

しようとする態度が妻の幸福感にとって重要であることが明らかになった。このような夫婦間の影響（クロスオーバー効果）は夫から妻に対してのみみられ、妻から夫に対してはみられなかったことは、注目すべき点であると思われる。この夫婦間の影響の一方向性については、今後、さらなる検討が必要である。

(3) 追跡調査

初回調査に夫婦ともに回答してくれた調査協力者のうち、住所の判明した 432 組に 3 年後（2014 年 2 月）に追跡調査を実施したところ、夫 327 票、妻 337 票の有効票が回収された。今後、これらのデータを集計し、人生マネイジメント方略、夫婦関係満足度、精神的健康の 3 年間の変化、および、その変化をもたらす要因を検討していく予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

Okabayashi, H. & Hougham, G. W. 2014 Gender differences of social interactions and their effects on subjective well-being among Japanese elders. 査読有, Aging & Mental Health, 18, (1), 59-71. DOI 10.1080/13607863.2013.788997

岡林秀樹 2011 我が国の最近一年間における教育心理学の研究動向と展望、発達部門（成人・老人）査読無 教育心理学年報, 50, 89-96.

岡林秀樹 2010 障害高齢者の現状と支援の課題 家族は介護ストレスにどう対処すべきか 査読無, 臨床発達心理実践研究, 5, 51 - 57.

〔学会発表〕（計 9 件）

岡林秀樹・竹村明子・塚原拓馬・松岡弥玲 2014 自己調節方略のライフコース 日本発達心理学会第 25 回大会ラウンドテーブル, 2014 年 3 月 22 日, 京都大学

岡林秀樹・高塚雄介・林 幹也 2014 成人期における自己調節方略と精神的健康の変化 地域居住者の横断調査に基づいて 日本発達心理学会第 25 回大会ポスター発表, 2014 年 3 月 22 日, 京都大学

Okabayashi, H. 2013 Self-regulation strategies and subjective well-being among older couples in Japan. Poster session presented at the 66th Annual Scientific Meeting of the Gerontological Society of America, New Orleans, Louisiana, November 20th, 2013.

岡林秀樹・登張真穂・中尾暢見・磯谷俊仁 2013 ライフコースの研究技法とその適用可能性（2） 日本発達心理学会第 24 回大会ラウンドテーブル, 2013 年 3 月 16 日, 東

京

Okabayashi, H. 2012 Cultural comparison of item difficulty in the SOC scale between Japan and Germany by using the Rasch model. Poster session presented at the 22nd the biennial meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development, Edmonton, Canada, July 9th, 2012.

岡林秀樹・登張真稲・藤原善美・伊藤教子・玉井航太 2012 ライフコースの研究技法とその適用可能性 日本発達心理学会第23回大会ラウンドテーブル 2012年3月11日, 名古屋

Okabayashi, H. 2011 Development of a Japanese version of the SOC questionnaire. Poster session presented at the 118th Annual Convention of the American Psychological Association, San Diego, California, August 12th, 2010.

岡林秀樹 2010 生涯発達と適応(教育講演),日本老年社会科学会第52回大会,愛知, 2010年6月18日

Okabayashi, H. 2009 Marital Activity and satisfaction among the Japanese elderly over a period of six years. Poster session presented at the 117th Annual Convention of the American Psychological Association, Toronto, Canada, August 7th, 2009.

〔図書〕(計 7件)

本田時雄・岡林秀樹(監訳) 2013 ライフコース研究の技法 多様でダイナミックな人生を捉えるために, 明石書店, 全470頁

岡林秀樹 2013 生涯発達心理学の研究 方法論 岡田圭二(編訳) 改訂エンサイクロペディア心理学研究方法論, 北大路書房, 331-333頁

岡林秀樹 2012 生涯発達と適応: 発達の意味するもの 磯崎三喜年(編著) 現代心理学: 人間性と行動の科学, ナカニシヤ出版, 119-132頁

岡林秀樹 2012 高齢期の対人関係と社会生活 下仲順子(編) 老年心理学[改訂版], 培風館, 134-146頁

岡林秀樹 2011 社会活動への参加 大川一郎他(編著) エピソードでわかる老年心理学, ミネルヴァ書房, 156-159頁

岡林秀樹 2011 家族介護2: 介護ストレスへの対処 大川一郎他(編著) エピソードでわかる老年心理学, ミネルヴァ書房, 156-159頁

岡林秀樹 2011 縦断的発達研究 日本発達心理学会(編), 子安増生・白井利明(責任編集), 発達科学ハンドブック3 時間と人間, 新曜社, 49-67頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡林 秀樹 (OKABAYASHI, Hideki)
明星大学・人文学部・教授
研究者番号: 90281675

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: